

## 語彙項目と構文の相互作用：認知文法における skewingの批判的検討を通して

その他のタイトル	How Lexical Items and Constructional Schemas Interact: A Critical Examination on Langacker?s “ Skewing ”
著者	氏家 啓吾
雑誌名	東京大学言語学論集 = Tokyo University linguistic papers (TULIP)
巻	41
号	TULIP
ページ	315-328
発行年	2019-09-30
URL	<a href="http://doi.org/10.15083/00078593">http://doi.org/10.15083/00078593</a>

## 語彙項目と構文の相互作用

— 認知文法における skewing の批判的検討を通して —

氏家啓吾

keigo5525@gmail.com

キーワード： 認知文法 使用基盤モデル 構文 skewing

### 要旨

本論文は語彙項目の意味と構文の意味との関係について認知文法の立場から考察するものである。語彙項目が構文の中で繰り返し使用されることによって構文に即した意味を得るに至る現象に関する Langacker の見解を紹介し、使用基盤モデルの立場から批判的に検討する。彼の提案する skewing という概念の問題点を修正することによって語彙項目と構文の相互作用を適切に捉えることができると主張する。

### 1. はじめに

本論文は語彙項目の意味と構文の意味の関係についてカテゴリー化の観点から詳しく論じている Langacker (2009a) を紹介し、批判的に検討するものである。

文法を構成する単位（構文）がそれ自体として意味を持つという立場（記号的文法観）に立ったとき、構文と語彙項目の組み合わせとしての表現全体の意味のうちどの側面を構文が担い、どの側面を語彙項目が担うのかという問いが生じうる。動詞に多数の語義を担わせることを避けようとする Goldberg (1995) の見解を Langacker は使用基盤モデルの立場から批判し、動詞が特定の構文で使用されることが慣習化している限りにおいて、それを動詞の持つ意味とみなすべきだと主張する。さらに彼は、どのような条件で動詞が構文に即した意味を持つに至るのかを明らかにしようと試みる。しかし、結論として提案される skewing 用法と skewing 構文の区別は概念上の問題を含むだけでなく、事実を適切に捉えられていない。

本稿は、構文とその事例表現の間のカテゴリー化関係に関する Langacker の見解を正しく押し進めれば彼の分析の問題点が解消されるということを示す。構文スキーマが複数の記号の組み合わせとしての記号（複合的記号体; symbolic assembly）であることに着目し、skewing とは構文の成分構造である動詞スキーマと実際に使用された動詞の間に成り立つカテゴリー化関係に基づくものであると考えることで、Langacker の一般化の反例となる事実を説明することができる。

まず 2 節で認知文法の語彙と文法に関する基本的な考え方を概観する。3 節では Langacker (2009a) の議論を詳しく紹介し、4 節では Langacker の分析の問題点を指摘し修正案を提示する。5 節はまとめである。

## 2. 認知文法の語彙と文法に関する基本的な考え方

### 2.1. 記号的単位

構文と語彙項目の関係に関する議論に入る前に、前置きとして認知文法の語彙と文法に関する基本的な考え方を概観する。認知文法では、ある言語の知識を構成するのは慣習化した言語的単位 (conventional linguistic unit) であると考えられている。言語的単位は、言語の使用を可能にする、ひとつひとつの定着した知識のことであり、音韻的単位 (phonological unit)、意味的単位 (semantic unit)、そして音韻構造と意味構造の両面をもつ記号的単位 (symbolic unit) がある。言語的単位が言語使用者の共同体の成員間で共有されていて、なおかつ共有されていることが認識されている場合、それは慣習化していると言われる (Langacker 1987: 57-63)。たとえば、「いちご」という語は日本語における慣習化した記号的単位である。ある言語を記述することは、慣習化した言語的単位が形づくるネットワークを明らかにすることにほかならない。複合的な表現に関しては、表現全体が単位になっている場合となっていない場合の両方がある。「いちご狩り」という表現は慣習的単位になっているが、それに対して「メロン狩り」は、「メロン」「狩る」といった構成要素の知識を組み合わせることで理解することができるものの表現全体としては十分に定着していないため、慣習的単位になっていない。

語彙を構成する単位である語彙項目 (lexical item) <sup>1</sup> が音韻形式と意味の両面をもつことは直感的にも疑いないが、それと同じく文法の知識の単位もすべて形式と意味の両面をもつと考える点が認知文法の特徴である。文法を知っているということは記号を組み合わせる複合的な記号を構築するパターンを知っていることであり、そのようなパターンひとつひとつを構文スキーマ (constructional schema) <sup>2</sup> という (3.2 節で詳しく述べる)。構文スキーマはある程度抽象的ではあるが、語彙項目と同様に音韻形式と意味の対として記述することができるのである。たとえば英語の二重目的語構文は、抽象的な音韻形式と特定の意味とが結びついた記号的単位であると言える。このように考えると、語彙を構成する単位である語彙項目と文法を構成する単位である構文スキーマは、どの程度抽象的かという点およびどの程度複合的かという点で異なるにすぎないことになる。

### 2.2. 使用基盤モデル

認知文法の言語知識に対する見方は、それを構成する語彙項目や構文スキーマなどの単位がすべて具体的な言語使用の場面 (usage event) から抽出されるとみなすことから、使用基盤モデル (usage-based model) と呼ばれる。抽出は、発話者の意図や状況などの豊かなコンテキストを伴った発話場面を繰り返し経験する中で、抽象化、比較、記憶への定着、統合、連想などとい

<sup>1</sup> 「語彙項目」という用語は、ここでは慣習的単位となっている記号のうち音韻面が十分に指定されているものを指して用いている。その場合、語彙項目には語未満のサイズのもの (接辞など) も複数の語からなるもの (イディオムなど) も含まれることになる。また、語であっても単位になっておらずその場で要素を組み合わせるようなものは語彙項目とは見なされない。

<sup>2</sup> 以下本稿では特に断りがない限り「構文」という用語をここでの構文スキーマと同じ意味で (すなわち、スキーマを含む複合的な記号的単位を指して) 用いる。

った言語使用者の心の能力を駆使して行われる (Langacker 1999: 93–94)。そして抽出された単位は、具体的なものと抽象的なものが互いに関係を結びつつ共存するネットワークをなす。

このことを見るために、英語の動詞 *send* と二重目的語構文のネットワークの一部を示した図を取り上げよう。それぞれの長方形が記号的単位を表し、それらの間を結ぶ矢印はスキーマとその事例の関係を表す (矢印の向きが何らかの前後関係を表しているのではない点にはとりわけ注意されたい)。

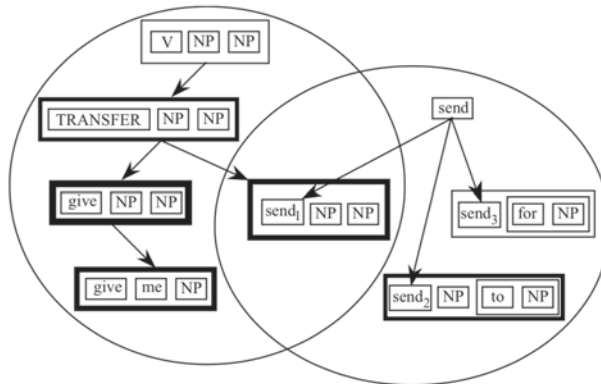


図 1. 英語の動詞 *send* と二重目的語構文のネットワーク (Langacker 2005: 145)

このように、[give me NP] などの直接目的語名詞句まで指定された形で丸ごと記憶された非常に具体的な単位から、二重目的語構文の最上位スキーマである [V NP NP] のような抽象的な単位まで、さまざまな抽象度の単位が互いにカテゴリー化の関係を結びつつ共存しているのである。上位のスキーマのたんなる適用事例であっても、それ自体が単位になっている (記憶に定着している) 限りにおいて言語知識の一部とみなされる。下に位置する [send₁ NP NP] や [give NP NP]、[give me NP] などを囲む長方形が太く、上に位置する [send] や [V NP NP] の長方形の線が細いのは、前者のほうが後者より強く記憶に定着していることを表している。つまり、動詞と構文が組み合わさった [send₁ NP NP] [give NP NP] などの具体的な単位は強く定着しているのに対して、それらの共通点として抽出された (構文に中立的な) 動詞や (動詞に中立的な) 構文のスキーマは相対的に際立ちが弱いと想定されているのである。動詞スキーマ [send] や二重目的語構文のスキーマ [V NP NP] の単位はネットワーク全体の中では相対的に際立ちが低く、より具体的な単位が言語知識の重要な部分を占める。

この見方のもとでは、ある語彙項目を知っているとは、その語彙項目を含む慣習的な表現のネットワーク全体を知っていることだということになる。つまり、*send* という語の意味を聞かれたら、最上位に位置する単独の *send* の単位だけではなく、構文と組み合わさった [send₁ NP NP]、[send NP to NP] などの単位を含んだネットワーク全体 (図の右側の大きな円の範囲) を提示しなければならないということである。この点は次節以降で動詞の語義を考えるにあたって重要なポイントとなる。

### 3. Langacker (2009a) の議論

本節では、動詞が構文の中で使われること、それによって動詞が構文に即した意味を持つに至ることに関する Langacker (2009a) の議論を見る。まず、特定の構文の中で使用された際の動詞の意味に関する Goldberg の見解に対する彼の批判を紹介し (3.1 節)、次に動詞が構文に即した意味を獲得するしくみをカテゴリー化の観点から説明する議論を見る (3.2 節)。最後にそうした語義の獲得がどのような条件で起こるかについての Langacker の一般化を見る (3.3 節)。

#### 3.1. 構文の中で使われた時の動詞の意味

Goldberg (1995) は構文が文の意味に独立の貢献を果たしていると主張する。次の例はそのことを明確に示している。この文はくしゃみによって目的語の指示対象を移動させることを表しているが、この「移動させる」という意味は動詞 sneeze の持つ意味ではないため、使役移動構文というパターンが持っている意味であると考えざるを得ない。

- (1) He sneezed the napkin off the table. (Goldberg 1995: 9)

動詞 kick はさまざまな構文に現れる。kick が使役移動構文で使われた場合に関しても、「移動させる」という意味は動詞ではなく使役移動構文が担っていると Goldberg は主張する。動詞に多数の語義を帰すことは避けるべきだと考え、動詞自体が担う意味は中立的な単一の (または少数の) 意味であるとするのである。したがって、たとえば使役移動構文 (*Pat kicked the football into the stadium.*) における kick と他動詞構文 (*Pat kicked the wall.*) における kick の語義は同じであり、文の意味の違いは構文の意味の違いに帰されることになる (Goldberg 1995: 11)。

Langacker (2009a) は構文の意味が文の意味に独自の貢献を果たすことは認めながらも、以上の議論を次のように批判している。この議論は動詞に多義性を認めることを嫌い、なるべく少数の語義を想定して済ませようとしている。だが、たとえば kick が単純他動詞構文、使役移動構文、結果構文、二重目的語構文で使われる場合、それぞれの構文に沿った意味すべてを kick が語義として持っているわけではないとしても、少なくとも kick が使役移動構文で使われることは十分慣習化しているだろう。もしそうであるならば、使役移動構文に即した意味を動詞が持っていると考えてよい、と彼は論じる。動詞がある構文に沿った意味を持っているかどうかは、その構文の中で使われることが慣習化しているかどうかによるのであって、理論的な考慮のみによって決められることではないのである (p. 251)。

たしかに、自動詞用法だけが慣習的用法である動詞 sneeze の場合には、使役移動構文で使われることは創造的な使用であるから、そこでの「対象を移動させる」という意味は動詞の語義とは考えられず、専ら構文が担っていると考えられる。しかし多くの場合、動詞と構文の組み合わせ自体が慣習的な単位になっている。そのような場合には、動詞が構文中立的な単一の意味しか持っていないと考える必要はない。このように、Goldberg (1995) のような語義をなるべく少なくしようとする立場 (minimal polysemy view) と、その逆にやたらと語義を多く認める立

場 (maximal polysemy view) のどちらをも Langacker は否定している<sup>3</sup>。

### 3.2. 動詞が構文に即した語義を獲得する仕組み：複合的カテゴリー化

では、どのようにして動詞が構文に即した意味を持つに至るのだろうか。ここで重要なのは、言語表現とカテゴリー化の関係に関する認知文法の見方である。カテゴリー化とは一般に、ある物事を既知の何かとして認識することである。カテゴリー化の対象 (T; target) がその基準となるもの (S; standard) と一致している場合、つまり T が S の事例である場合には、それは「精緻化」(elaboration) となり、T の特徴の中に S の特徴と一致していない点があればそれは「拡張」(extension) となる。後者の場合には S の特徴が T に投影され、新たな心的対象 T' (ブレンドの産物としての「ブレンド」) が生み出される (Langacker 2009a: 229)。

認知文法では、言語使用においては (産出であれ理解であれ) 使用イベントの諸側面が話者の言語的単位によってカテゴリー化されると考えている。ネズミを表す英語の名詞 mouse を例にとろう。使用場面において、発話の中の mouse (T) を既存の単位 mouse (S) として捉えるカテゴリー化が生じる。字義通りの意味で使われている場合には、T に S と一致しない点はないため精緻化の関係になる。一方、たとえばこの語がコンピュータ機器のマウスを指して初めて使用された場合には、発話の中の未知の対象 (T) とそれをカテゴリー化する既存の単位 mouse (S) の間に不一致があるため、拡張的カテゴリー化となる。そしてこのとき、「ネズミに似たものとして捉えられたコンピュータ機器のマウス」というブレンド T' が生じる。この拡張的カテゴリー化がある話者において繰り返し生じれば、新たな意味構造 T' が定着して単位となり、それが共同体に広がれば名詞 mouse の慣習的語義のひとつになる (Langacker 1999: 107 を参照)。

複合的表現の場合には、カテゴリー化の関係がより複雑になる。複合名詞 jar lid (びんのふた) という表現を考えよう。この語は jar と lid という 2 つの構成要素が見出せる。構成要素それぞれが音韻と意味の両面を持つ記号であり、表現全体もまた記号である。複合的表現の構成要素を成分構造 (component structure)、表現全体を合成構造 (composit structure) といい、それら両方からなる組み合わせの構造全体を複合的記号体 (symbolic assembly) という。

この構造は、複合的なカテゴリー化とみなすことができる。合成構造 jar lid は、成分構造 jar と lid の合わさったもの〈として〉理解されるのである。構文とはこのような複合的記号体から抽出されたパターンであると言える。jar lid という表現からは、名詞 N<sub>1</sub> と名詞 N<sub>2</sub> を組み合わせ、N<sub>2</sub> を主要部とした複合名詞 N<sub>3</sub> を作り出す構文スキーマが、たとえば抽出されるかもしれない<sup>4</sup>。したがって構文スキーマ自体も、成分構造たる記号と合成構造たる記号からなる (いくぶん抽象的な) 複合的記号体なのである。さらに、構文スキーマとその事例表現の間には、それぞれの要素同士の間にはスキーマとその事例というカテゴリー化関係が成り立つ。以上のことを図示したのが下の図である。左側が構文スキーマであり、右側がその事例表現である。こ

<sup>3</sup> この問題に関する Langacker と Goldberg の間の議論については、Langacker (2005)、Goldberg (2006: 10.6 節)、Langacker (2009b) も参照。

<sup>4</sup> その構文スキーマは、toothbrush, alarm clock など事例として含む。この例については Langacker (2008: 6.2 節) で詳しく論じられている。

で、スキーマと事例の両方が複合的記号体であること、そして構文と事例の間にカテゴリー化関係が成り立っているだけでなく、構文の成分構造スキーマと事例表現の成分構造との間にもカテゴリー化関係が成り立っていることに注目してほしい。

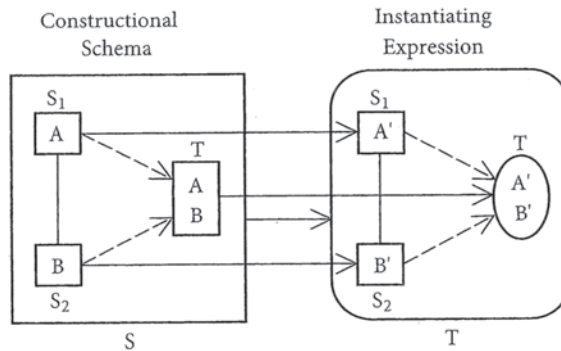


図 2. 構文スキーマとその事例表現の間のカテゴリー化関係 (Langacker 2009a: 236)

動詞 kick を使役移動構文の中で使ったとしよう。そのとき（事例表現の成分構造である）動詞 kick と、（構文の成分構造スキーマである）使役移動述語との間にカテゴリー化関係が成り立つことになる。つまり、「この動詞 [=kick] とこの構文 [=使役移動構文] を組み合わせることは、kick が使役移動述語として認識されることにほかならないのである」（Langacker 2009a: 253）。もし新しい使い方であればそれは拡張的カテゴリー化となり、「使役移動動詞としての kick」という新たなブレンド T'が生じる。kick が新たな語義を得るのは、このカテゴリー化が繰り返し生じ T'が単位として定着・慣習化した時である。動詞 kick が使役移動動詞としての語義を持っているとは、このように、使役移動構文の中で使われることが慣習化していることである。

基本的に自動詞用法で使われる動詞 sneeze の場合には、使役移動構文での使用は創造的な使用となるが、そうであってもなお、その組み合わせが実際に使われた使用イベントにおいては sneeze が使役移動動詞〈として〉捉えられているということが重要である。何らかの事情でそのような使用が繰り返されれば、定着・慣習化して sneeze の新たな語義となる可能性が十分にある。拡張的使用は新たな語義の獲得への第一歩なのである<sup>5</sup>。

まとめると、動詞が構文に即した新たな語義を得るに至るしくみは次の通りである。

- ① ある動詞が新たに特定の構文で使われるとき、動詞がその構文にふさわしい動詞として捉え直される。
- ② それが繰り返し起こることでその用法が定着・慣習化する。このとき動詞が構文に即した語義を獲得する。

<sup>5</sup> この点に関して、Langacker (2005) でも同趣旨の議論が展開されている。そこでは、くしゃみでものを飛ばすことがもし若者の間でブームになったら、sneeze の使役移動用法が定着・慣習化し新たな語義となるだろう、と論じられている。

### 3.3. 動詞が構文に即した語義を獲得する条件：skewing 用法と skewing 構文

以上、動詞が構文に沿った語義を獲得するしくみについての議論を見た。そのあと Langacker (2009a) はさらに、そのような語義の獲得が起こる条件を明らかにしようという野心的な試みに取り組む。以下ではその議論を紹介し、4 節でその問題点を指摘する。

彼が目にしたのは、動詞の意味と文全体の意味に不一致があるとき、その不一致を文中の何が担っているのかという点である。たとえば *He sneezed the napkin off the table.* においては、動詞 *sneeze* と文全体が表す意味の間に不一致がある。*sneeze* は通常自動詞的な事態を表すにもかかわらず、文全体は対象を移動させる事態を表している。このような齟齬を感じさせる用法を、「skewing 用法」と呼ぶ。このような用法は繰り返し用いられることによってしだいに齟齬が感じられなくなりやがてその動詞の語義として確立されていくという点は前節で論じた通りである。

しかし、このような語義の発展が常に起こるわけではない。次の受動構文の表現において、動詞の表す意味 (蹴る) と文全体の表す意味 (蹴られる) に不一致がある (トラジェクター (TR) とランドマーク (LM) が反転している<sup>6</sup>) ことは確かだが、*kick* がここで蹴られるという意味で使われているとは言いがたい (p. 256)。

(2) Pat was kicked by a mule.

*sneeze* の例のような齟齬がここには感じられない。受動構文で *kick* が使われることが定着したからといって、*kick* に「蹴られる」という語義が生じるとは考えられない。Langacker によればこれは、受動構文には動詞と文全体の意味の不一致を担う要素 (skewing element) として、接辞 *-ed* が含まれているからだという。使役移動構文では動詞と構文の指定との不一致によって skewing が生じるが、受動構文には skewing が内在しているのである。このように動詞の意味と文全体の意味の不一致が内在している構文を、skewing 構文と呼ぶ (p. 256)。上述の通り、動詞の新たな語義の獲得には ①動詞の意味の捉え直し、および ②その定着・慣習化が関わっている。しかし不一致を担う要素が内在している skewing 構文においては動詞の意味の捉え直しがそもそも生じず、したがって新たな語義を得ることもないということである。

skewing 構文には、特定の要素が担っているわけではないようなものもある。次のようないわゆる way 構文では、動詞の意味と文全体の意味の相違を構文そのものが担っている<sup>7</sup>。

(3) Pat kicked his way out of the operating room. (Langacker 2009a: 251)

<sup>6</sup> トラジェクターおよびランドマークは、言語表現が表す関係のそれぞれ主役および準主役である。文の表す関係のトラジェクターは通常主語と、ランドマークは目的語と一致する。動詞 *kick* では蹴る側がトラジェクター、蹴られる側がランドマークとなるが、受動構文になると蹴られる側がトラジェクターとなる。ここではそのことを反転と言っている。

<sup>7</sup> Langacker (2009) は受動の接辞 *-ed* などの skewing element と skewing 構文を別の類として扱っているが、ここでは簡潔さを優先して skewing element を含む構文を skewing 構文に含める用語法を採用した。



文全体は移動を表すが、目的語名詞句も前置詞句も移動そのものを表してはいない。動詞 kick も通常動作主の移動を表すものではないため、この文の移動の意味は構文そのものから生じる意味であると考えられる。つまり、way 構文は動詞と表現全体の意味の不一致をそれ自身のうちに含んでいる。それゆえ、way 構文では構文による動詞の意味拡張は生じないのである (p. 275)。他に結果構文、場所主語構文に関して、彼は skewing 構文に含めて論じている。

以上の Langacker の見解をまとめると、次のような一般化になる。

(4) 動詞の意味と文全体の意味に不一致がある時には次の 2 つの場合があり、動詞の新たな語義の獲得が起こるのは (i) の場合だけである。

(i) 不一致を動詞そのものが担う場合 (skewing 用法)

(ii) 不一致を構文または構文の動詞以外の要素が担う場合 (skewing 構文)

(i) の skewing 用法が生じる構文には、上で論じた使役移動構文が含まれる。(ii) の skewing 構文には受動構文、way 構文、場所主語構文、結果構文などが含まれる。

#### 4. Langacker 説の問題点と修正

##### 4.1. 問題点

Langacker は skewing 用法と skewing 構文を区別することによって動詞が構文に即した意味を獲得することが生じる条件を与えようとした。その結論は、動詞と文の意味の不一致を動詞そのものが担う場合にはそうした事態が生じうが、構文 (またはその特定の要素) が担う場合にはそうした事態が生じない、というものであった。

ところが実際には、受動構文や場所主語構文といった skewing 構文とみなされるものであっても、動詞が構文にふさわしい意味に捉え直されることや、定着・慣習化して新たな語義を獲得することが起こっているように見える。

Langacker (2009a) では例として次のような場所主語構文も扱われている。

(5) a. The garden is swarming with bees.

b. My cat is crawling with fleas.

(Langacker 2009a: 259)

通常は動作の主体を主語に取る動詞がそのままの形で使われているが、これらの文ではその動作が行われる場所が主語となり、主体は with 句で表現されている。ここにも動詞の意味と文全体の意味の不一致がある。この TR の配置換えを担っている特定の要素はないことから、彼はこの構文を skeing 構文の事例とみなしている。そうすると上記の一般化から、この構文に現れる動詞には構文に沿った新たな語義は生じないはずである。Langacker は次の例を挙げ、実際にそうした語義は生じていないと主張している。

- (6) a. Her child was shouting with joy. The shouting child ...  
 b. Her child was screaming with pain. The screaming child ...  
 c. Her garden is really swarming with bees. \*The swarming garden ...  
 d. Her cat was crawling with fleas. \*The crawling cat ... (Langacker 2009a: 261)

もし *swarm* や *crawl* が場所主語構文に即した慣習的語義を持っているならば *shout* や *scream* と同じように名詞修飾に用いることができるはずであるが、実際にはできない。したがって新たな語義は生じていない、というのである。

しかし、この事実は動詞 *swarm*, *crawl* に語義が生じていないことの証拠になるだろうか。そもそも使用基盤モデルの立場に立つならば、名詞修飾に用いることができないからといって慣習的語義になっていないとは必ずしも言えないであろう。Langacker 自身も、「この議論が全く完璧なものでないことは認識している」(p. 260) と述べ、脚注で次のような反例と思われる例も挙げている。

- (7) The woods are teeming with wildlife. The teeming woods ...

この例について、*skewing* 構文でも「表現全体に沿うように動詞が新たな語義を得ることが絶対にありえないわけではないことを示しているのかもしれない」と述べている (p.260)。そうだとすると、上記の一般化 (4) は修正が必要になる。

より明確な例として、次のような英語の中間構文を考えてみよう。この例では通常行為者を主語に取る動詞 *drive* が使われているが、文の主語は行為の対象になっている。

- (8) The car drives smoothly. (Yoshimura and Taylor 2004: 293)

ここには、TR の配置換えという形で動詞の意味と文の意味の不一致が存在する。この不一致は中間構文スキーマに含まれているものであると考えられるので、*skewing* 構文の事例とみなされるだろう。したがって動詞の新たな語義は生じないはずである。ところが中間構文に現れる動詞の中には、中間構文での用法が定着・慣習化し語義として確立されていると思われる動詞が存在する。

- (9) This book sells well. (Yoshimura and Taylor 2004: 298)

動詞 *sell* は中間構文と特に相性がよく (Yoshimura and Taylor 2004: 305)、この構文で使われることが慣習的用法となっている。そのことを反映して、辞書にも *sell* のひとつの語義として “to be bought by people in the way or in the numbers mentioned; to be offered at the price mentioned.” と、商品を主語にした用法の記載がある (*Oxford Learner's Dictionary of Academic English*, 2014)。さ

らに、動詞 sell は次のように best-selling, slowest-selling のような複合的形容詞を生産的に形成することができる。

- (10) a. This jacket is our best-selling item. (Taylor 2003: 125)  
b. The accolade for the world's slowest-selling book (known in US publishing as slooow sellers) probably belongs to (...) (web<sup>8</sup>)

このことも動詞 sell の商品を主語とした中間構文用法が定着し動詞 sell の慣習的語義となっていることを示していると言える。これは、構文に沿った動詞の捉え直しが生じていないにも関わらず繰り返し使われることで動詞が新たな語義を獲得しているという点で、Langacker の想定に反する事例である。

さらに、(4) の一般化には別の種類の反例も存在する。skewing 構文とされる受動構文においても、動詞が構文に沿った意味で使われるという事態が生じているように見えるのである。受動構文に生起する動詞は、行為者の働きかけによって対象が何らかの影響を受ける事態を表す動詞であるとされる。

- (11) a. The stranger approached me.  
b. I was approached by the stranger.  
c. The train approached me.  
d. \*I was approached by the train. (Bolinger 1975: 68)

動詞 approach は必ずしも対象への影響を含意しないが、対象が何らかの影響を受けるような状況を表す場合には受動構文を形成できるのである。このとき、(11b) においては動詞 approach が対象に影響を与えるような事態を表す動詞として使われていると言えるのではないだろうか。つまり、受動構文で使われるときには、動詞が受動構文にふさわしい動詞として捉え直されているのである。これは使役移動構文において生じていることと同様であり、定着・慣習化して新たな語義を獲得することもありうるはずである。この事実もやはり、Langacker による一般化 (4) に反している。

#### 4.2. 修正案：構文内動詞スキーマによるカテゴリー化

Langacker による (4) の一般化に反して、skewing 構文においても構文に即した動詞の捉え直しや、定着・慣習化による新たな語義の獲得が生じている例があることを見た。構文スキーマと事例表現のカテゴリー化関係を改めて整理することによってこの問題は解消する。

まず前掲の図2に立ち戻ろう。そこで論じた通り、構文スキーマと事例表現の間には成分構造・合成構造それぞれのレベルでカテゴリー化関係が成り立つ。したがって、動詞をある構文

<sup>8</sup> <https://www.guinnessworldrecords.com/world-records/slowest-selling-book/>

で使った場合には必ず、構文の成分構造である動詞部分のスキーマ（以下、構文内動詞スキーマ）とその動詞の間にカテゴリー化関係が結ばれる。使役移動構文であれば対象を移動させる事象を表す動詞のスキーマ、受動構文であれば対象に影響を与える事象を表す動詞のスキーマが、構文内動詞スキーマとして特定の動詞をカテゴリー化する。重要なのは、その構文が意味の不一致を担うかどうかとは関わりなくこのカテゴリー化が生じることである。したがって、動詞が使用において構文にふさわしい動詞として捉え直されることは、どんな構文でも起こりうるのである。

このように、構文による動詞の捉え直しは構文内動詞スキーマと特定の動詞の間に関わることである。それらの間に不一致があるとき動詞の意味がスキーマに沿って捉え直され、臨時的な意味拡張が生じる。これが *skewing* 用法である。それに対して、動詞と文の意味の不一致を構文が担うという *skewing* 構文の特徴づけは、構文スキーマの成分構造と、その合成構造の間に関わることである。構文内動詞スキーマと合成構造との間に不一致がある構文であっても、その動詞スキーマに合致しない動詞をスキーマに沿うよう捉え直して使用することはありうる。受動構文の (11b) はそのような例として位置づけられることになる。

Langacker は *skewing* 用法と *skewing* 構文を排他的な分類としているが、以上のように整理するならば、これらが排他的ではないことは明らかである。彼の分析の問題は、このように別の軸に属する事柄を誤って対立関係にあるとみなしたことから生じているのではないだろうか。*skewing* という用語を使うならば、動詞の意味と文の意味の不一致の有無に関わりなく、この構文内動詞スキーマによる動詞の捉え直しおよびその結果として生じる臨時的な意味拡張を指して用いるのが適切であろう。

構文内動詞スキーマは複合的記号体の一部であり、それ自体スキーマ的な音韻と意味を持つ記号である。構文が事例から抽出される以上、構文内動詞スキーマの性質はどのような動詞を含む事例表現から抽出されたかによって決まる。*skewing* の可能性は、この動詞スキーマの性質によって規定されるだろう。その動詞スキーマに沿った動詞が使われれば通常の使用となり、そこからあまりに大きく逸脱した動詞が使用されれば、容認されない表現になるであろう。ある程度逸脱した動詞が使われれば *skewing* が生じ、捉え直しが生じる。

#### 4.3. 分析可能性の減少により新たな語義が生じる場合

残る問題は、動詞 *sell* の (9) における用法に見られるような、構文に沿った動詞の捉え直しが生じていないにも関わらず繰り返し使用されることによって新たな語義を獲得している例である。動詞 *sell* は中間構文の構文内動詞スキーマからの逸脱がないため、中間構文にふさわしい動詞としての捉え直しが起こっているとは考えられない。

こうした例は分析可能性の減少 (*loss of analyzability*) として捉えられる。分析可能性とは、複合的な表現に関してそれぞれの成分構造が合成構造に貢献していると感じられる度合い (Langacker 1987: 448)、つまり複数の記号からなる記号が複数の記号からなるとどの程度意識されているかである。その場で記号を組み合わせで作られた新奇な表現は部分の意味を考慮し

て全体の意味を理解しなければならないため分析可能性が高い。表現が定着・慣習化すると、しだいに全体がひとまとまりの記号として捉えられて各成分構造が意識されなくなり、分析可能性が減少する傾向がある。たとえば日本語の「あつという間」という表現は、改めて考えると「あつ」「と」「言う」「間」という4つの記号に分割できるが、今やこれらの成分構造の貢献はほとんど意識されていないだろう。

分析可能性の減少は、構文と動詞の組み合わせの表現についても適用できる (Langacker 2009a: 244)。動詞 sell の中間構文用法はもともとは中間構文のスキーマを動詞 sell に適用した産物として捉えられていたが、その結びつきが定着・慣習化した結果スキーマを適用しているという意識がなくなり、中間構文を一度経由せずとも商品を主語とする sell の用法にアクセスできるようになったのである。中間構文スキーマが意識されなくなることは実質的に sell が新たな語義 (商品を主語とする語義) を獲得することに等しい。(5) – (7) で見た swarm や teem などの場所主語構文でよく使用される動詞についても、構文の貢献が少しずつ意識されなくなった結果として動詞の1つの語義として認識されていることは十分にありうる<sup>9</sup>。

このように、構文内動詞スキーマによる動詞の捉え直しが生じていない場合でも、分析可能性の減少という一般的なメカニズムによって、動詞が構文に即した語義を得ることがありうるのである。

## 5. 結語

以上、動詞の意味と構文の意味の関わりに関する Langacker (2009a) の見解を紹介し、そこで提案されている skewing 用法と skewing 構文という概念について批判的に検討した結果、構文とその事例のカテゴリー化関係に関する Langacker 自身の考えを正常に適用すれば、これら2つはそもそも対立するものではなく別の軸に属することであり、したがってその問題点は解決されることを見た。skewing という概念は、構文内動詞スキーマによる動詞のカテゴリー化によって動詞の意味が構文に沿って捉え直されるという事態を指すものとして用いるならば、有用な概念であると思われる<sup>10</sup>。

## 参考文献

Bolinger, Dwight (1975) On the passive in English. *The First LACUS Forum*, 57-80.

Goldberg, Adele E. (1995) *Constructions: A Construction Grammar Approach to Argument Structure*. Chicago: University of Chicago Press.

Goldberg, Adele E. (2006) *Constructions at Work: The Nature of Generalizations in Language*. Oxford:

<sup>9</sup> 使役移動構文に関して見たような skewing の定着・慣習化においても、分析可能性の減少は関与している。ただし使役移動構文と特定の動詞の組み合わせに関する分析可能性の減少は、動詞の慣習的用法からの逸脱が意識されなくなるという形で生じる。

<sup>10</sup> より一般的に構文の成分構造スキーマによる事例表現の成分構造の捉え直しと考えるならば、多くの言語現象が分析の射程に入る。氏家 (2017) では日本語の「地図をたよりに」構文についてこの考えを適用している。

Oxford University Press.

- 平沢慎也 (2017) 「[NP by which] 構文を使いこなすために必要なもの—理解と記憶のメンタル・コーパス—」『東京大学言語学論集』38: 25–49.
- Langacker, Ronald W. (1987) *Foundations of Cognitive Grammar volume 1: Theoretical Prerequisites*. Stanford: Stanford University Press.
- Langacker, Ronald W. (1999) A dynamic usage-based model. in *Grammar and Conceptualization*. New York: Mouton de Gruyter.
- Langacker, Ronald W. (2005) Construction grammars: Cognitive, radical, and less so. In Ruiz de Mendoza Ibanez, Francisco J. and M. Sandra Pena Cervel (eds.), *Cognitive Linguistics: Internal Dynamics and Interdisciplinary Interaction*. Berlin and New York: Mouton de Gruyter, 101–159.
- Langacker, Ronald W. (2008) *Cognitive Grammar: A Basic Introduction*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Langacker, Ronald W. (2009a) Constructions and constructional meaning. Evans and Pourcel (eds.) *New Directions in Cognitive Linguistics*. 225–267.
- Langacker, Ronald W. (2009b) Cognitive (construction) Grammar. *Cognitive Linguistics*. 20 (1):167–176.
- Taylor, John R. (2003) *Linguistic Categorization 3rd edition*. Oxford: Oxford University Press.
- 氏家啓吾 (2017) 「「地図をたよりに」構文と非飽和名詞」『東京大学言語学論集』38: 287–301.
- Yoshimura, Kimihiro and Taylor, John R. (2004) What makes a good middle? The role of qualia in the interpretation and acceptability of middle expressions in English. *English Language and Linguistics*. 8(2): 293–321.

# How Lexical Items and Constructional Schemas Interact: A Critical Examination on Langacker's "Skewing"

UJIIE Keigo  
keigo5525@gmail.com

Keywords: Cognitive Grammar, usage-based model, construction, skewing

## Abstract

This paper explores the interrelation between lexical meanings and grammatical constructions from the viewpoint of Cognitive Grammar. After critically examining Langacker's view as to how a lexical item develops a constructionally induced sense, I will show that it has some conceptual and empirical problems. Then I propose a revision of the notion of "skewing", thereby suggesting the proper way to understand the interrelation between lexical meanings and grammatical constructions.

(うじいえ・けいご 東京大学大学院)